山口建治さんとのことなど

吉川良和

神奈川大学に着任する四か月ほど前、一九八六年の暮れだったかと思うが、初めて山口さんの声を聞いた。面接があるとかで、神大の場所を教えてくれたのである。結論的には、わかりにくいから学生の後をついてくるようにというご指示であったが、どんよりとした曇り空の午後三時過ぎ、学生らしき影はほとんど見られなかった。

山口さんの姿を初めて見た印象は、がっちりした体付きで、いかにも頼り甲斐のある風情であった。後ろ姿は一種「山建」組の筋者的オーラさえも感じさせる。時に、大声で怒りを爆発させるので、学生は当初恐れをいだくようである。だが、外見とは裏腹に、その訥々とした話し方にも人情がこもっていて、心の温かさが赤外線ストーブのようにじわりじわりと伝わってくる。気付かぬうちに、その人間味に取りこまれてしまうのだ。学生も、次第に怒りの噴火にも慣れきって、ただ優しい父親という父性を感じるらしい。

いわゆる「すすどさ」というものが、山口さんにはみじんもない。それが、ときに怒りとなり、ときには同情となる。勝手に誤解をして憤慨されることもあるが、謝るのも、これまたすばやい。こうした愛すべき実直さ、その人柄が、なん回か学部長に推挙されたゆえんであろう。

当時、拙宅が比較的近かったこともあり、最初の新学期が始まる前に、元々機械に疎い私を、なかば強制的にPC・プリンタ一式を買うため、車で連れて行ってくれた。おかげで、悪筆な私も人様に見せられるようになって、拙文も推敲を重ねやすくなった。これ以後、一貫してそのご厚意にとりすがっていれば、間違いなしという甘い考えがわが身にしみつき、今日にいたっている。

山口さんは意志が強いのか、なん回か禁煙をしたが、また吸っていてやめなかった。近年はさすがに、喫煙の姿を見ないが、お酒の方は、あいかわらずその意志の強さを堅持（建治？）されている。当初、私も現役で、しばしば飲みにいった。あるとき、中国語の「酒鬼（飲んだくれ）」というコトバが話題となり、いつかは「酒聖」や「酒仙」の境地にいたるという説が出たが、山口さんはまだその境地には達していないようだ。空腹の子供のように、酒がないと、よく落ち着かず、不機嫌になる。いったん酒がはいると相好がくずれ、じつに楽しい酒となる。そして、ご機嫌は熱弁となり、声はますます大きくなる。次第に小さくなる尾上兼英先生の神秘のお告げと熱弁との間で、ひたすらうなずき苦労した。堅固な外見ににあわず、なん回かひとなみに病気になられたようではあるが、酒に関連する病ではないらしい。強固な意志をあいかわらず堅持され、ご酒を嗜まれている。

山口さんと知りあったころは、『白蛇伝』に関心をもたれ、やがて「ういろう」研究に入るころから、研究の核になるものを探りあてられてようである。ご自分の研究を「江湖学」と命名され、やくざな「ヤシ」などから「うそ」「ういろう」などの宛字に着目されるにいたった。そして、中国字音が日本に伝来したときに、その「字音」の日本語音化する過程を考証され、新しい研究領域を開拓された。「酒鬼」の瑞縁からか、熟慮をかさねかさねて、ついにその名も『オニ考』という画期的な高著を上梓された。

私自身も、非識字者が圧倒的多数の中国旧社会の俗文化を研究しているので、漢字の表意文字的一面だけに関心をよせる研究に不満な一人として、漢字の字音に焦点を当てた、「山口江湖学」には大いなる興味を懐いてきた。その一端を、いつも酒席の熱弁で私に口伝してくれる。このたびの『オニ考』は、さまざまな学問領域に跨る研究であり、各方面から意見も出ようが、語彙論だけでなく、言語社会学、また両国の民俗などの関係にせまって、くらいついた力作として、後世にのこるだろうと思う。

山口さんとの付き合いで、もう一つの事柄がある。それが芸能である。一九八八年秋、新内界の重鎮・岡本文弥師が団長となって、中国の語り物を鑑賞してまわる旅行団に、山口さんと私も一緒に加わった。上海、蘇州、成都と珍しい語りの実演を、かずかず鑑賞できた。このとき、これまた中国の芸能につよい関心をもたれていた尾上先生も参加され、じつに楽しく有意義な旅行であった。

帰国後ほどなく、山口さんの発案で、「中国芸能研究会」を結成し、神奈川大学に本部をおく話になった。尾上先生に運営委員長の職をお願いして、山口さんと私も、運営委員になった。とりあえず「中国芸能通信」を発行をしようと、発案されたのも山口さんだった。いま思えば、まさにタイムリーな時機で、八〇年代に入ると、文革の呪縛からとかれ、中国大陸では伝統芸能の復活が次々になされて、存命の名人上手がまだ舞台に立っていた。私も八二年初めて北京に入って、南京・蘇州・上海とまわり、京劇だけでなく地方劇の劇場や、漫才・講談から各種歌入りの語り物を演じている寄席に通った。

こうした時代背景の下に、研究者や留学生、あるいは仕事や旅行で中国大陸に渡る人々が徐々にふえ、芝居、語り物、音楽、舞踊、雑技という五ジャンルの中国芸能の世界を自分の目で観、耳で聴く時代が到来した。それ

に、当時は見料も格安で、手頃に観られた。しかも中国人にまだ見巧者がいて、演者も手を抜かず熱演していた。そこで、日本にも中国芸能の愛好者が急増した。そうした人々に、中国芸能の情報を提供し、また情報を寄せて貰う、「芸能通信」はその役割を担い、日本で唯一の情報誌となった。創刊は一九八九年六月十四日号である。

内容は、中国現地での芸能見聞、来日芸能の鑑賞記、演劇大学の留学記・演劇や語り物の学校訪問記、寄席や劇場の紹介、自らの京劇出演体験記、さらに音楽美学、袁世海や梁谷音など名優の寄稿もあった。また、名人の事跡を連載して、中国の舞台芸術家の人生・生活、そして習芸過程を日本に紹介した。演劇に偏重しがちであるが、中国講談や漫才、そして山口さんは蘇州の語り物「弾詞」の名人・徐雲志の事跡の翻訳を連載された。また、その頃、興味を持たれていた『白蛇伝』について、「語りもの『白蛇伝』の系譜」も連載されている。

梅蘭芳については、一九九一年に歿後三十年、九四年には生誕百年を記念して特集をくんだ。また、建国以後、禁演となっていた「儺戯（民俗芸能）」に関しても、八〇年代後半の民間宗教研究の解禁による「儺文化ブーム」を反映して、現地での見学・調査報告が載せられ、さらには、少数民族や台湾の情報も盛られている。また、中国語学にも有益で、中国芸能の枢要を知ることができる「芸能用語集」も掲載してある。このように、「中国芸能通信」の記事は、様々な領域に亘っており、今日読んでも、読み応えがあり、まだ中国古典芸能が生き生きとしていた時代の息吹を感じさせるのである。

「通信」の発行の翌年、一九九〇年七月二一日、山口さんの熱意と尾上先生のご尽力で、いよいよ第一回「中国芸能研究会」の結成準備委員会が、慶應義塾日吉校で開かれた。山口さんが司会を担当し、委員長の尾上先生が、開会の挨拶をされた。この挨拶の言葉はいま読み返しても、誠に肯綮に当たっていると、改めて敬服されら

れる。中国芸能の研究を大学の講座として据えることを主張しておられ、研究者と演者との交流も奨励されている。こうしたことを、山口さんも実践してこられたし、私も心がけてきた。

研究会では、日中の演者にワークショップをしてもらったり、ビデオに解説をつけて、理解を深めた。講談の神田松鯉師、京劇の立廻りの振付を田震氏、北方の語り物の音楽を孫玄齢氏、京劇の化粧・衣装を葉芳氏、京劇の女役を蘇東花氏に、音楽では費堅蓉氏の中国三弦等々、また鈴木健之氏の「宝巻」や田之倉稔氏の武漢雑技大会のビデオも貴重であった。

百名以上の会員を擁した中国芸能研究会ではあったが、私の怠慢もあり、後継者に恵まれず、ほぼ十年で自然休会となり、「中国芸能通信」も四一・四二合併号を最後に休刊となった。ただ、山口さんから会費の残金があるというので、崑劇と京劇の将来を担う若手の逸才を招待してワークショップをすることにした。上海崑劇の沈鉱氏は崑劇老生の俳優であり、演出家でもある。崑劇の素晴らしい歌唱と道化などの動作や台詞回しを実演してくれた。その後、北京国家京劇院の劉大可氏には、京劇の隈取の解説から、実際に化粧してもらい、その歌や演技を見せてもらった。と、同時に二人に歌舞伎座や能楽堂、現代劇や上演中のイタリア喜劇などの観劇、国立劇場の舞台裏の見学をして見聞を拡げてもらった。地道であるが、必ずや将来に活かしてくれるだろうと確信し、今日でも交流を続けている。

中国音楽研究所の準教授・孫玄齢氏が、新内を岡本文弥師に習うというので、山口さんは通訳をかねて、ご自分でも岡本一門に入り稽古をした。孫氏はそのうちに辞めたが、山口さんは演唱会で芸も披露され、ご自分でも語り物芸の奥深さを体験され、「染華太夫」というような名取となった。山口夫人が染織の専門家であることに

由来している。ちなみに、毎年夫人の作品を拝見しているので、『オニ考』の表紙の柄が夫人のものであると、すぐにピンときた。「あとがき」にも、奥様に謝辞を述べられている。まことに愛妻家の面目躍如たるところである。

山口さんとなん度か、中国旅行をした。八〇年代後半には、天津の北方曲藝学校を訪問した。蘇州の評弾学校とならぶ、中国の二大国立語り物学校である。北方各種の語り物を、学生たちの実演で鑑賞することができた。京韻大鼓の孟岩という演者が、気になったと見えて、破顔しながら盛んに彼女の名前を出した。山口さんには浮いた話は聞いていないが、私の知るかぎりではふんわりとした面立ちの女性がお気に入りのようである。

三月の天津に雪が降り、宿舎に帰ると、夜の寒さもあって、山口さんは酒が所望らしかった。だが、べつに必要もないのではという言葉に、いささか不機嫌になられた。仕方なく暗い夜の雪道を、ほのかな明かりをめざして、酒を買いに行ったことを記憶している。翌日は、寄席の「中華曲苑」に案内された。今度はプロの出演で、客がときに一緒に歌うような熱狂的な反応のなか、山口さんは客席のドまんなかに堂々と三脚を立て、ビデオ撮影を始めたところ、係員が飛んできて、たしなめた。愛すべき「無神経ぶり」の数ある中の一齣としてよき想い出になっている。八〇年代後半から、中国も徐々に上演中の撮影を禁止するようになった。もっとも、あちらは「やるならこっそりやれよ」ということらしかったが。

また、山口さんを誘い、宿願の「温州鼓詞」や「温州崑曲（草崑）」、「甌劇」を目ざして温州に飛んだ。コト弦と太鼓を撃ちながら語るという珍しい「温州鼓詞」の名人の素晴らしい実演に触れ、また南戯『張協状元』の復活公演のリハーサルを見学した。帰りに寧波・余姚に寄って「甬劇」「姚劇」も演じてもらい、河姆渡遺跡で

は、横笛の始祖になる「骨哨」の実物も見ることができた。

山口さんと湖南に旅行したのは、二〇〇九年の三月であった。湖南祁劇「目連劇」のビデオを観るためであった。同じ湖南の辰河目連劇は、それより二十年前に実演を観たが、論文によく出て来る祁劇目連をぜひ知りたいと連絡をしたところ、湖南芸術研究所の所長が快く、我々二人のために数日見せてくれた。往年の名人の名演を堪能でき痛く感激した。ただ、見ているのは我々二人だから、あちらも注視している。いつものことながら、私の最大の心配事は、素晴らしい芸能を見ると、睡魔に襲われるという山口さんの習性である。ときには、イビキをかくので、そちらが気になって舞台やビデオに集中できないことも、日本ではなん度かあった。舞台といえば、私が観劇に招いたり、ご子息が子方で能舞台に出演されたりで何度か招待を受けた。「眠かった」と漏らされるが、好奇心旺盛な山口さんはじつに芸能がお好きなのである。

湖南長沙での数日、私は唐辛子がダメなので、山口さんは付きあってくれて、宿舎から唐辛子抜きの料理屋を探し回り、結局、近くの一軒でほぼ毎回食べた。長沙から、祁劇の本場・邵陽に所長は車で連れて行ってくれた。夜、魅力あふれる祁劇を鑑賞できた。帰りは湘潭に寄って毛沢東の生家を尋ねた。同じ三月でも天津とうってかわって、真夏のように暑かった。熱烈歓迎の毎日で、ひたすら唐辛子「辣椒」を避けたのだが、焼酎「辣湯」の欠乏ということはなく、山口さんとの湖南行も無事、ご機嫌でおえられた。

私はその後、諸事情で訪華の機会がないが、山口さんは「江湖学」を展開・探究するため、精力的に日本と中国の旅を重ねておられる。まだまだ好奇心の塊である。数年前、その山口さんが本年度で、めでたく定年退職と聞いて、初めて私より三歳下であることを知った。建康寿命は七十二歳といわれる。私はもう不健康寿命に入る

が、山口さんには、あと二年のこっているから、有効に使って「江湖学」を究めることを天命とするよう、などとプレッシャーをかけるのもヤボなことなので、定年後も酒と芸能を楽しまれんことを望みたい。山口さんと遇えたことは、私の人生において、まことに僥倖といわざるをえない。どうか、「オニ」の研究と同時に、まだ「酒聖」、まして「酒仙」にならず、まずはいかにして愛すべき「酒鬼」となるかを研究して頂き、これからもお付きあい願いたい。

二〇一六年晩秋